

総合コミュニケーション 英語文法

岸野英治 著

岡田伸夫
(大阪大学教授)



伝統的な教員／学習者のための英文法書は、5文型や現在完了形、受け身、関係代名詞などの文法事項を柱にし、それぞれを個別に取り上げ、その形の上の特徴——たとえば「主語＋動詞＋目的語」とか「have＋過去分詞」とか——を提示し、次に、それらの意味や機能について説明する。

それに対して、本書は、時間（現在、過去、未来）、法性（推量・可能性、命令、疑問など）、否定、原因・理由、目的・結果などの概念と、許可・禁止、依頼・勧誘、提案・申し出、欲求・願望などの機能——現行の学習指導要領で「言語の働き」と呼ばれているもの——を柱にして編集されている。一言で言うと、本書は、コミュニケーションアプローチで用いられる概念・機能シラバスを具現化したものである。発信型の英文法書、表現のための英文法書と言ってもよい。

本書にはユーザーフレンドリーな工夫がいろいろ施されている。まず第一に、各章の冒頭に、その章で取り上げる概念や機能を例示する基本文例が10個程度、一目で俯瞰できる形で提示されている。たとえば、8章「依頼・勧誘の表し方」の冒頭には Will you, Could you, Can I, Would you be kind enough to, If you will, I wonder if, I'd like you to などと始まる依頼・勧誘表現が12例並んでいる。その次に、それぞれの形が担う意味や機能やそれぞれのスピーチレベルに関する簡潔で的を射た説明が出てくる。複数の依頼・勧誘表現を比較対照することによって個々の特徴を浮き彫りにする本書のアプローチは、TPO にふさわしい英語を使う能力を育成するのに極めて効果的である。複数の依頼・勧誘表現を、互いの意味や機能の違いに十分な注意を払わないまま、個別に学習する従来

のアプローチだけでは、それらを TPO に即して使い分ける力を育成することはむずかしい。

例文が豊富であることも本書の顕著な特徴である。例文はいずれも、英語を聞き、話し、読み、書く場面で実際に使われる、生きた例文である。

すべての例文に日本語訳がついていることも本書の特徴である。日本語訳は読む必要がなければ読まなくてもよいが、意味を確認したいときには重宝する。

本文中には語法・文法に関する優れた記述が随所に見られる。また、NOTE や、例文につけられた注記に、近年の語法・文法研究で発掘された知見が簡潔に提示されているが、これらの中には進んだ読者の興味を引くものも多い。語法・文法に関する本書の優れた記述の例を4つだけあげておこう。have to に「～に違いない」という推定の用法があることを知らない大学生がいる現状を踏まえると、have to にも、must 同様、推定の用法があるという記述 (p. 184) は当を得ている。また、文副詞の certainly を使う文が、certainly を使わない文より話者の確信度が高いと誤解している学生も少なくないので、certainly に関する「話し手の確信度が極めて高く、100%に近いことを表す」(下線筆者) という記述 (p. 184) も有益である。また、would like to が、「好き」を表す like to の控え目で丁寧な表現ではなく、want to の直接的な言い方を避けた控え目で丁寧な言い方であるという明示的な説明 (p. 283) も有益である。また、先行する主節を意味上の主語とする分詞の用法 (Late frosts came, completely ruining the crops.) に言及している (p. 391) ことも、この用法が生英語で頻繁に用いられていることを考慮すると適切である。

最後に、本書が、書名に「文法」という表現を含んではいるが、実際には語法に大きな比重をかけた本であることを付言しておく。そのことは、たとえば16章「強調の表し方」で、分裂文や疑似分裂文などの構文による強調を扱った部分が4ページ強にすぎないのに対して、perfect, entirely, ever などの語による強調を扱った部分が12ページに上ることや、つなぎ語 (besides, in other words, by the way など) に関する記述が2つの章を占めているということに如実に現れている。

パラグラフ・ライティング 指導入門 —— 中高での効 果的なライティング指導のために

大井恭子 編著
田畑光義・松井孝志 著

清水公男

(木更津工業高等専門学校教授)



英語を学ぶ学習者にとっても、英語を教える指導者にとっても、ライティングは大変負荷のかかる活動である。なぜなら、同じコミュニケーションの手段である「聞く・話す」活動と異なり、英語を書く行為はメタ認知と思考のプロセスを要する、ごまかしのきかない手間のかかる作業だからである。単語のアルファベットや語句・文をきちと書くことから始まり、伝えたい内容やメモを箇条書きに整理し、ブルーフ・リーディングを繰り返しながら書き、さらに書こうとしていることを読み手にできるだけ正確に伝えようとする作業は、書き手と書き手自身の間の、そして教師と学習者の間における根気比べの学習活動である。本書はこのようなハードルの高いライティング指導・研究に長年取り組んでこられた編著者の方々による示唆に富んだ、国内の教室にいる学習者の「学び」のプロセスを丁寧にたどっている指導書である。

特筆すべき点は2つある。1つは本書が、これまで出版された多くの TESOL からの受け売りのライティングの指導書や問題集と異なり、具体的な授業実践例や英文例を豊富に紹介しており、しかも平明かつオーセンティックな内容になっていることである。もう1つの点は、ライティング指導を通じて、最近話題になっているクリティカル・シンキングという全ての教科教育に通底するリテラシーの涵養に寄与しようという意図が、随所に読み取れることである。

本書は全6章から構成されている。巻末には、高校入試と大学入試のライティング関連の問題が、入試対策のための資料として紹介されている。

第1章、第2章は理論編である。第1章ではライティングに関する認知的プロセスが詳述されており、第

2章ではいわゆるパラグラフ・ライティングの概念が説明されている。第3章は第4章の豊富な実践指導例につながる章で、文レベルからパラグラフ・ライティングへの「橋渡し」的役割を果たしている。著者も述べているが、この部分がこれまでの日本のライティング指導では欠けていた部分であるというのはかなり当たっているのではないだろうか。今でも、さらに今後にも存在するであろう、ライティング指導における accuracy vs. fluency 論争の根源も、この辺りにあると思われる。学習者がどの段階まで量的・質的に書けるように到達したら次の段階（パラグラフ・ライティングなど）に進んだらよいのか。文法ベースの指導（和文英訳等）にとどまるのか、それをどの段階でどう超えていくかなどのノウハウを、この章を読んだ方々と大いに議論したいところである。

後半の第4章には、中学校と高等学校で指導実績のある著者らによる詳細なステップを踏んだ、様々なタスクに対応した文章スタイルを指導する実践例が紹介されている。後半の高校生の作文指導例はかなりハイレベルな感じがしないでもないが、各指導事例における指導ロジックを自分の教室での学習者レベルに合わせてとらえることで、いかに授業を組み立てていくかのシミュレーション的知見が得られるのはありがたい。第5章（個人的には第3章と並び関心がある）には中学校現場から得られた誤答分析のデータが収録されている。驚かされるのは、中学校におけるミスが高校になってもあまり改善されていないということである。自分の指導力不足を痛感しつつ、どのタイミングで、どのようにして学習者の躓きの指導（feedback）をすべきなのかと改めて考えてしまうのである。p. 218以降の誤答分析を授業に生かす箇所は、その方略等に関する色々な議論のトピックを与えてくれるが、本書のその他のページも読み込めば読み込むほど色々な話題を提供してくれる。その意味でも一読に値する本である。ここまで学習プロセスを支援する指導手順について触れてあるので、機会があれば、パラグラフ・ライティングの作業上の躓きのレベルに応じた具体的な feedback の方略のノウハウ、grammar for writing の指導法などについてもご教示を請いたいところである。